成人前期の LGBT 許容に関連する要因

Factors of LGBT Tolerance in Early Adulthood

上　野　淳　子
Junko UENO

要旨

性自認や性的指向の多様性への理解や受容が進んでいるが，未だ法制度にも人々の意識にも様々な課題がある。LGBT の許容に関連する要因を明らかにするため，25-39 歳の 500 名を対象としたインターネット調査を実施した。LGBT は全体的に許容されていたが，LGBT という枠組みではなく単なる問題行動として捉えられがちな「異性的ふるまい」と，子どもへの影響を懸念してか「同性の両親による育児」を許容する者は半数に届かなかった。従来の研究と同様に女性は男性より LGBT を許容する傾向にあった。性別の根拠として性自認を重視することはトランスジェンダーの許容につながるが，同性愛の許容には関連しなかった。男女には身体的能力や育児能力といった様々な能力差があるという認知は，LGBT 許容度と負の関係にあった。平等主義的性役割態度は LGBT 許容度と最も関連していた。性は社会的に構築されたものであるというジェンダー概念の普及と，本質主義的な男女の能力差を否定し平等な性役割を実践することの重要性が示された。さらに性の曖昧さ，多様さを LGBT 問題にせず，全ての人に関わる問題と認識できるような教育・啓発活動が必要である。

キーワード：ジェンダー，性自認，性的指向，性役割，性の多様性
Key Words: gender, gender identity, sexual orientation, gender role, gender/sexual diversity

1．問題と目的

あらゆる分野における多様性が推進されているが，そのひとつに性の多様性がある。LGBT と総称される性的マイノリティへの関心も高まっており，性自認や性的指向の多様性への理解や受容が進んでいる。2004 年の性同一性障害特例法施行により，性自認が身体的性別や戸籍上の性別と一致しない性別違和への一般的認知度が飛躍的に高まった。また，2015 年の渋谷区を皮切りに同性パートナーシップ制度を導入する自治体が増加している。だが多様性社会の実現はまだ道半ばである。現行の性同一性障害特例法は性別の曖昧さや揺らぎを認めていない。性同一性障害は DSM-5 では性別違和に名称変更され脱障害化し（American Psychiatric Association, 2013），男性でも女性でもない第 3 の性別を公的に認める国や地域が増えているにも関わらず，日本では性別は男女の二択であり，性別適合手術や結婚，子どもの有無が戸籍の性別変更の条件に関わっている。こういった点で現行法は，社会的に構築されたものであり変更可能であるという本来のジェンダー概念と異なり，むしろジェンダーこそ生まれながらの本質的なものと位置づけ（土場，1999），男女二元論と異性愛主義を強化しているのだ。また，同性パートナーシップ制度に法廷拘束力はなく，同性婚とは異なる。異性カップルと同等の権利を同性カッ

プルには認めず，同性カップル独自の制度で対応することは，同性愛をかえって周縁化しているとも言える。これら制度上の欠陥が示しているように，日常生活においても LGBT への無理解や差別は厳然として存在する。

性の多様性理解に有用なのは本来のジェンダー概念であると考えられる。性を社会的，文化的に構成されたものとして捉えるジェンダー概念は，男女の本質的差異を強調し性自認や性的指向も固定化されたものとする考え方に対立し，それを解体する。Table1（上野，2016）が示す通り，性別はジェンダーとセックスの様々なレベルを含んでおり，セックスの概念は典型以外を病理として扱うが（性分化“疾患”），ジェンダーの概念は異なる。したがって，性別をジェンダーの観点で捉える者は LGBT への理解，受容度も高いと予想できる。

Table1　性別のレベル（上野，2016）

<table>
<tr><th colspan="2">レベル</th><th>典型的女性</th><th>典型的男性</th><th>非典型</th><th>非典型／他レベルとの組み合わせが典型と異なる場合の診断名</th></tr>
<tr><td rowspan="4">セックス</td><td>染色体</td><td>46, XX</td><td>46, XY</td><td>45, X
47, XXY
など様々な染色体異常</td><td rowspan="4">性分化疾患</td></tr>
<tr><td>性腺</td><td>卵巣</td><td>精巣</td><td rowspan="3">様々な形態異常</td></tr>
<tr><td>内性器</td><td>子宮・卵管・
膣上部 1/3</td><td>精巣上体・
輪精管・精嚢</td></tr>
<tr><td>外性器</td><td>陰核・陰唇</td><td>陰茎・陰嚢</td></tr>
<tr><td rowspan="4">ジェンダー</td><td>ジェンダー・
アイデンティティ
（性自認）</td><td>「女性」という
自己認識</td><td>「男性」という
自己認識</td><td>両性（男女いずれでもある）
中性（男女の中間である）
無性（男女いずれでもない）
などの自己認識</td><td>性別違和
性同一性障害</td></tr>
<tr><td>ジェンダー差</td><td>「女性的」とされる特徴に合致</td><td>「男性的」とされる特徴に合致</td><td rowspan="2">両性的（男女いずれにも合致）
中性的（男女の中間にあたる）
無性的（男女いずれにも合致しない）
など</td><td rowspan="2">—</td></tr>
<tr><td>ジェンダー役割</td><td>「女性的」とされる規範に合致</td><td>「男性的」とされる規範に合致</td></tr>
<tr><td>法制度（日本）</td><td>女性</td><td>男性</td><td>—</td><td></td></tr>
</table>

ただ，ジェンダー概念が常に男女の本質的な差異を否定し，性自認や性的指向の多様性を認めるものとして機能するとは限らない。既に述べたように性同一性障害の概念はジェンダーを本質的なもの，つまり「心の性別」は生まれつき決まっているものと捉える傾向にある。セックスを基礎としてジェンダーが築かれる，つまりホルモンバランスや中枢神経の機能が異なるためいわゆる「男性脳」や「女性脳」の違いが生まれ，それがジェンダーを生み出すと考えると，それぞれのセックスに合った能力や心理を持つようになるのは当然ということになる。セックスも社会的に構築されたものであるという Butler（1999）の指摘や，「男性脳や女性脳が存在する」というまなざしそのものが男女の能力差を生み出すという実証研究（例えば Beilock, Rydell, & McConnell, 2007）をふまえると，能力や役割の男女差を認知，肯定しているかどうかが多様性の許容に関係してくると考えられる。

本研究の目的は，LGBT の許容に関連する要因を明らかにすることである。ジェンダー概念は LGBT 許容に関連すると考えられるので，性別の根拠としてジェンダーを重視する者ほど

LGBT 許容度が高いと予想される。また，男女に能力や役割の本質的差異を見出さない者ほどLGBT 許容度が高いだろう。

調査対象者は 20 代後半から 30 代とした。この世代は 2004 年施行の性同一性障害特例法など性別決定や変更の議論および制度に馴染みがあり，さらに成人ゆえに性自認を確立している可能性が高い。また，就職や結婚など性別が関わるライフイベントを自身や周囲が経験している可能性が高く，社会における性別の扱いやジェンダー役割について体験的に理解し，自らの意見を有していると考えられるためである。

2．方法

調査手続き

2015 年 9 月，調査会社に委託してインターネット調査を実施した。

調査参加者

調査会社のモニター登録者のうち，25–39 歳（M=32.10，SD=4.43）の 500 名が調査に参加した。性別は「男性」,「女性」,「その他（詳細を自由記述）」の選択肢としたが,「その他」を選択した参加者はおらず，男性が 208 名（41.60%），女性が 292 名（58.40%）であった。

質問項目

一般的な性別の根拠　一般的に性別を判断する際、どの要素がどの程度重要だと思うかを尋ねた。Table1（上野，2016) をもとに作成した,「その人の性染色体が XY（男性）か，XX（女性）か」(性染色体),「その人の体の中に子宮や卵巣，精巣や精嚢があるかないか」(性腺・内性器),「その人の男性ホルモン，女性ホルモンの分泌量がどのくらいか」(性ホルモン),「その人の体に男性器，女性器がついているかいないか」(外性器),「その人の全体的な外見が女性に見えるか，男性に見えるか」(外見),「その人本人が自分の性別をどう認識しているか」(性自認),「その人の能力や性格が女性的か，男性的か」(性役割),「その人が周囲の人からどの性別として扱われているか」(周囲の扱い),「その人が戸籍にどの性別で記載されているか」(戸籍）の 9 項目について,「非常に重要である」(5 点）から「全く重要でない」(1 点）で回答を求めた。

自己の性別の根拠　先の質問と対応する項目を示し，自身の性別の根拠について尋ねた。「あなたの性染色体からそう判断できるから」(性染色体),「あなたの体の中の器官（子宮や卵巣，精巣や精嚢など）からそう判断できるから」(性腺・内性器),「あなたの男性ホルモン，女性ホルモンの分泌量からそう判断できるから」(性ホルモン),「あなたの体についている性器（男性器，女性器など）からそう判断できるから」(外性器),「あなたの全体的な外見からそう判断できるから」(外見),「あなた自身が自分の性別をそう認識しているから」(性自認),「あなたの能力や性格からそう判断できるから」(性役割),「あなたが周囲の人からその性別として扱われているから」(周囲の扱い),「あなたの戸籍にその性別で記載されているから」(戸籍）の 9 項目のうち最大 3 項目を選択するよう求めた。

男女の能力差認知　8 種類の能力（Table3）について一般的に男女どちらが高いと思うか,「男性が非常に高い」から「女性が非常に高い」までの 7 件法で回答を求めた（中点は「男女差

はない／個人による」)。

平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S） 個人的レベルにおける男女平等主義的態度を測定するため，鈴木（1994）の尺度を用いた。全15項目に対し，「まったくそのとおりだと思う」から「ぜんぜんそう思わない」までの5件法で回答を求めた。

LGBT許容度 9種類の行動（Table4）に対し，現在の日本でこういった行動が可能か，よくあることかとは関係なく，自身がどう思うか，「全くかまわないと思う」から「全くよくないと思う」までの7件法で回答を求めた。

3．結果

性別の根拠

一般的な性別の根拠の項目得点を被験者内一要因分散分析，平均値間の差の検定（Bonferroni）で比較した。性別の判断において他より重要度が高いとみなされているのは性自認と外性器，他より重要度が低いとみなされているのは性役割と性ホルモンであった（$F(8, 3992)=78.21$, $p<.001$)。因子分析（最尤法，promax回転）を行ったところ，セックスにあたる因子とジェンダーにあたる因子に分かれた。自己の性別の根拠として選択する者が最も多いのは外性器と性自認であり，半数以上が選択していたが，性役割と性ホルモンを選択する者はほとんどおらず，一般的な性別の根拠と同様の結果であった。以上の結果は全てTable2に示した。

Table2 性別の根拠の分析結果

	一般的な性別の根拠				自己の性別の根拠	
	M	*SD*	因子負荷量 F1	因子負荷量 F2	*n*	%
セックス（α=.85）						
性染色体	3.30	1.26	.76	-.09	86	17.20
性腺・内性器	3.42	1.26	.99	-.09	203	40.60
性ホルモン	2.74	1.01	.47	.23	13	2.60
外性器	3.61	1.20	.79	.09	277	55.40
ジェンダー（α=.80）						
外見	3.09	1.11	.07	.64	110	22.00
性自認	3.75	1.14	.14	.43	265	53.00
性役割	2.74	1.11	-.17	.78	17	3.40
周囲の扱い	3.09	1.09	-.02	.81	72	14.40
戸籍	3.22	1.18	.26	.54	115	23.00

男女の能力差認知

男女の能力差認知全8項目について，回答を「男性が高い」,「男女差はない／個人による」,「女性が高い」に分類して度数と％を算出し，さらにもとの7件法のデータを用いて因子分析（最尤法，promax回転）を行った（Table3)。因子分析の結果，機械的能力，身体的能力，職業的能力，理系的能力から成る男性的能力と，育児能力，家事能力，社交能力，文系的能力から成る女性的能力という2因子が見出された。ただしどの項目においても一般における認知とは逆の性別の能力が高いと回答する者が1-5%台存在し，さらに男性的能力のうち職業的能力と

理系的能力，女性的能力のうち社交能力と文系的能力は「男女差はない／個人による」を選択した者が最も多かった。特に職業的能力および文系的能力は「男女差はない／個人による」とする者が多かった。

Table3　男女の能力差認知の分析結果

	n(%)			*M*	*SD*	因子負荷量	
	男性が高い	差はない	女性が高い			F1	F2
男性的能力（*α*=.78）							
機械を操作，修理する機械的能力	344（68.80）	135（27.0）	21（4.20）	5.05	1.11	.74	-.07
走る速さ，力の強さなどの身体的能力	397（79.40）	83（16.60）	20（4.00）	5.53	1.22	.74	.11
働いて成果や利益を出す職業的能力	183（36.60）	291（58.20）	26（5.20）	4.49	1.00	.70	.05
数学，理科の成績に関わる理系的能力	226（45.20）	246（49.20）	28（5.60）	4.58	0.94	.59	-.05
女性的能力（*α*=.62）							
小さい子どもの世話をする育児能力	9（1.80）	162（32.40）	329（65.80）	2.90	1.07	-.13	.70
料理，掃除，洗濯などの家事能力	15（3.00）	235（47.00）	250（50.00）	3.27	1.00	-.07	.65
人と会話し，気遣う社交能力	21（4.20）	243（48.60）	236（47.20）	3.30	1.08	.03	.44
国語，社会の成績に関わる文系的能力	27（5.40）	368（73.60）	105（21.00）	3.80	0.78	.29	.43

男女差を大きく認知しているほど得点が高くなるよう，中点である「男女差はない／個人による」を 1 点，「男性がやや高い」および「女性がやや高い」を 2 点，「男性がかなり高い」および「女性がかなり高い」を 3 点，「男性が非常に高い」および「女性が非常に高い」を 4 点に変換し，合計得点を算出した。

LGBT 許容度

LGBT 許容度各項目の回答を「かまわないと思う」，「どちらともいえない」，「よくないと思う」に分類した（Table4）。いずれの項目においても「かまわないと思う」が最も多かったが，「異性がするような言葉づかいやふるまいをすること」と「同性同士が両親となり，子どもを育てること」の 2 項目は「かまわないと思う」が半数を下回り，4 人に 1 人は「よくないと思う」と回答していた。「かまわないと思う」が 60％を超えるのは「戸籍の性別を本人が望む性別に変更すること」と「同性同士が恋人として交際すること」の 2 項目であった。

もとの 7 件法のデータを用いて因子分析（最尤法，promax 回転）を行ったところ，3 因子が見出された（Table4）。第 1 因子は異性的ふるまいや外見といった項目から成っていたので，「ジェンダー不整合許容」と命名した。第 2 因子は社会的，身体的な性別を変更する項目から成っており，「トランスセクシュアル許容」と命名した。第 3 因子は，同性同士が親密なパートナーとなる項目で構成されていたので，「同性愛許容」と命名した。3 因子それぞれの合計得点を算出した。

Table4　LGBT 許容度の分析結果

	n(%) かまわない	どちらとも	よくない	*M*	*SD*	因子負荷量 F1	F2	F3
ジェンダー不整合許容（α=.82）								
異性がするような言葉づかいやふるまいをすること	229（45.80）	148（29.60）	123（24.60）	4.46	1.50	.71	-.03	.03
異性がするような髪型や服装をすること	267（53.40）	145（29.00）	88（17.60）	4.77	1.49	.95	.03	-.00
トランスセクシュアル許容（α=.91）								
職場や学校などで，戸籍上の性別ではなく，本人が望む性別で扱われること	262（52.40）	160（32.00）	78（15.60）	4.78	1.49	.22	.59	.07
手術で身体的性別を変えること	289（57.80）	130（26.00）	80（16.20）	4.88	1.54	-.01	.77	.16
戸籍の性別を，本人が望む性別に変更すること	300（60.00）	133（26.60）	67（13.40）	4.99	1.54	-.05	.98	.02
同性愛許容（α=.94）								
同性同士が性的関係を持つこと	289（57.80）	128（25.60）	83（16.60）	4.92	1.66	.00	-.05	.99
同性同士が恋人として交際すること	309（61.80）	114（22.80）	77（15.40）	5.01	1.65	.00	-.00	.98
同性同士が結婚すること	294（58.80）	116（23.20）	90（18.00）	4.89	1.71	-.02	.20	.74
同性同士が両親となり，子どもを育てること	228（45.60）	149（29.80）	123（24.60）	4.47	1.68	.11	.16	.54

LGBT 許容度と他変数の関連

男女の能力差認知得点（α=.82），SESRA-S 得点（α=.85），LGBT 許容度３因子得点間の Pearson の相関係数を算出したところ，全て有意であった（Table5）。男女の能力差認知は他変数との間に負の相関があり，SESRA-S は LGBT 許容度との間に正の相関があった。LGBT 許容度の因子間には正の相関があった。

Table5　相関分析結果

	SESRA-S	ジェンダー不整合許容	トランスセクシュアル許容	同性愛許容
男女の能力差認知	-.26***	-.25***	-.20***	-.21***
SESRA-S	—	.41***	.44***	.42***
ジェンダー不整合許容	—	—	.63***	.58***
トランスセクシュアル許容	—	—	—	.79***

***p<.001

女性を１点，男性を０点，自己の性別の根拠として性自認を選択した者を１点，選択しなかった者を０点とダミー変数化した。性別，性自認重視，男女の能力差認知得点，SESRA-S 得点を独立変数，LGBT 許容度の各因子得点を従属変数とする重回帰分析を行った（Table6）。性自認重視から同性愛許容度以外のパスが有意であり，女性であること，性自認を重視すること，男女の能力差は小さい（ない）と認知すること，平等主義的性役割態度を有することが LGBT の許容に結びつくことが示された。

Table6　*t* 検定結果

	β			VIF
	ジェンダー不整合許容	トランスセクシュアル許容	同性愛許容	
性別	.12 **	.17 ***	.17 ***	1.01
性自認重視	.10 *	.12 **	.06	1.07
男女の能力差認知	-.15 ***	-.09 *	-.11 **	1.09
SESRA-S	.34 ***	.37 ***	.36 ***	1.13
R^2	.21 ***	.24 ***	.22 ***	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

4．考察

性別の根拠の因子分析ではセックスにあたる因子とジェンダーにあたる因子が見出され，セックスとジェンダーの概念は学問上だけでなくデータの上でも明確に区別されることが分かった。セックスの中では外性器，ジェンダーの中では性自認が，自己や他者の性別の判断において最も重視されていた。競技上の公平性を担保するため男女のセックスの厳密な区別を試みているスポーツの世界では，外性器から性染色体へと性別判定の根拠は変遷し（來田，2010），現在は性ホルモン値が用いられている。しかし，性ホルモンは一般的には性別の根拠として重視されていないことが分かった。外性器は最も分かりやすく，出生時の最初の性別の判断に用いられている。それに加え性自認を重視する人が多かったのは，性別違和への認知度の高さが影響しているのであろう。

男女の能力差認知の因子分析結果から，機械的能力，身体的能力，職業的能力，理系的能力を男性が優れているとみなす傾向，育児能力，家事能力，社交能力，文系的能力を女性が優れているとみなす傾向が依然としてあることが分かった。特に男性の身体的能力，女性の育児能力が高く評価されていたが，文系的能力は 4 人に 3 人，職業的能力は半数以上，理系的能力，家事能力，社交能力は半数近くが男女差はない，もしくは男女差よりも個人差が大きいと判断しており，能力によってはステレオタイプが解消されつつあることもうかがわれた。

LGBT 許容度はどの項目も「かまわない」と思う者が最も多く，各項目の平均点も 7 点満点中 4 点台であり，全体的には受け入れられていることが分かった。しかし項目によって違いが見られ，異性的ふるまいは比較的許容されにくかった。性別違和は性同一性障害という診断名を与えられることにより「障害」としてラベリングされ，皮肉にも理解と受容が促進されたが（性別適合手術や戸籍の性別変更の許容度が高いこともそれを示している），異性的ふるまいは LGBT というくくりで捉えられにくく，単なる逸脱，問題行動として認識されやすいからではないか。また，性別違和とは対照的に治療対象から外れ脱病理化したことで受容が進んだ同性愛については，全体的に許容度は高いものの，同性カップルによる育児は許容されにくいことが分かった。子どもの発達への懸念がその背景にあると考えられるが，実際には同性カップルによる育児に悪影響はないことが示されている（American Psychological Association, 2005)。周囲の「同性カップルによる育児は好ましくない」というまなざしこそが子どもへの悪影響をもたらすと考えられるため，子どもの発達に関する正しい知識の普及が必要である。

女性は男性よりLGBTを許容する傾向にあった。同様の結果が従来示されているが（Baird, 2001），本研究においてはLGBTの視点で捉えられにくいレベルのジェンダー不整合も女性の方が許容していた。男性中心社会において周縁化されている女性の方が逸脱に寛容であると解釈できる。性自認の重視は，ジェンダー不整合とトランスセクシュアルというトランスジェンダーの許容にはつながるが，同性愛の許容には有意なパスが見られなかった。LGBTと一括りにされがちであるが，LGBは性的指向，Tは性自認が非典型であることを示す別個の概念であり，その理解や受容のプロセスも異なるものであることが改めて示されたと言えよう。男女の能力差の認知は，予想通りLGBT許容度と負の関係にあった。また，男女の能力差を信じるからこそ持つようになると考えられる性役割への支持は，LGBT許容度との関連が最も高く，平等主義的性役割態度であるほどLGBTを許容していた。

以上のことから，LGBTの許容につながる平等で寛容な社会のためには，性を社会的に構築されたものとするジェンダー概念により性別は相対的で多様であるという認識を普及させ，本質主義的な男女の能力差を否定し平等主義的な性役割を推進，実践することで男女二元論を脱することが有効であると考えられる。近頃，性の多様性をLGBT問題に限定，矮小化するのではなく，全ての人々の性が多様であることを示すSOGI（Sexual Orientation and Gender Identity）の概念が用いられるようになってきた。この概念のもとでは，あらゆる人が当事者となり，性の多様性社会への道筋が見えてくると期待できる。性の曖昧さ，多様さをLGBT問題にせず，全ての人に関わる問題と認識できるような教育・啓発活動が必要だろう。

付記

本研究で示した結果の一部は，2017年3月27日の日本発達心理学会第28回大会（於広島国際会議場）にて「性別の根拠に関する成人前期の意識」として，2019年6月9日の日本心理臨床学会第38回大会（於パシフィコ横浜）にて「性差の認識がLGBTの許容に与える影響―成人前期の意識―」として発表された。

引用文献

American Psychiatric Association（2013）. *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: DSM-5*. Arlington: American Psychiatric Publishing.

American Psychological Association（2005）. Lesbian & gay parenting.（https://www.apa.org/pi/lgbt/resources/parenting-full.pdf）

Baird, V.（2001）. *The no-nonsense guide to sexual diversity*. Oxford: New Internationalist Publications Ltd.（ベアード, V. 町口哲生（訳）（2005）. 性的マイノリティの基礎知識　作品社）

Beilock, S. L., Rydell, R. J., & McConnell, A. R.（2007）. Stereotype threat and working memory: Mechanisms, alleviation, and spillover. *Journal of Experimental Psychology: General, 136*, 256-276.

Butler, J.（1990）. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. London: Routledge.（バトラー, J. 竹村和子（訳）（1999）. ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱――　青土

社）
土場　学（1999）. ポスト・ジェンダーの社会理論　青弓社
來田享子（2010）. スポーツと「性別」の境界――オリンピックにおける性カテゴリーの扱い――　スポーツ社会学研究 , *18*, 23-38.
鈴木淳子（1994）. 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成　心理学研究 , *65*, 34-41.
上野淳子（2016）. セックスとジェンダー――性別はどうして決まるのか，そして誰が決めるのか――　青野篤子（編著）　アクティブラーニングで学ぶジェンダー――現代を生きるための 12 の実践――　ミネルヴァ書房 , 13-25.